
深海の王

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海の王

【Nコード】

N5658C

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

銀色の目玉をした新種の深海魚ギンバエギヨの飼育実験中におきたある出来事。

低調なリズムで呼吸をする空調の音がする。それ以外は、まったく静かで、ときどき小さな水音がするだけだった。

完璧に調節された気温と湿度。人間にとっては幾分か低い温度に設定されたその空間は、実験棟の地下にあった。

青白く光度の落とされた蛍光灯の反射する蒼いタイルが、生き物の腹のように鈍く光っている。

扉は重く閉ざされていて、外の光は完全に閉ざされている。

コツコツと靴音がよく響くのは、壁に敷き詰められたタイルのせいだ。

巨大水槽の中の澄んだ水は循環しているため常に清潔に保たれている。

その中を銀色の目玉をした大きなグロテスクな魚が数匹泳いでいる。

この部屋の主は、まるで外にいる人間を逆に監視しているように錯覚させる。

脇の下に変な汗が滲んでくる。この環境は魚のためには完璧だが、人間は長くは居られない。顔は、ボーリングの玉ぐらいで、体はその半分以上しかない魚の名はギンバエギョ。最近発見された新種の深海魚だ。光のない深海で育った魚の多くは眼球が劣化しているのが普通だが、この魚には異様な眼球が四つも付いている。

それはまるで蠅の目玉のようにギョロギョロと動く。

実験ではこの目が本当に光を捉えるための器官なのかを確かめるはずだった。

そのために、特別に最高の環境を実験棟の地下に作った。

「本当に気分が悪くなる」

「早いとこ終わらそう。なんか寒くなってきたし。」

「やっぱり見られているのかな」

初老の男性がペンライトをぐるぐると回転させる。

魚の眼球は光を追っているようではないが、ギョロギョロと動く。明るさを落としたり、逆に強くしたりしてみても特に強い反応はなかった。

「やっぱりコレは眼ではないのか」

「そうかもしれないですね」

若い研究員は、魚と眼があった気がしてすこし顔を逸らした。

「猫の眼みたいに暗くしたら見えるんじゃないですか？」

「そうかもしれない」

初老の男が同意する。

「おい、蛍光灯も消してみよう。」

若い男は赤外線でも暗くても見えるようにしてあるカメラを水槽に向けた。

「準備できました、消してみてください」

パチ

完全な闇がこの部屋を支配する。

研究員は何も見えない完全な闇の中で水槽の方向を見ていた。

「もう……いいか？」

「いいだろう、電気をつけろ」

蛍光灯がつき、徐々に目が光に慣れてくる。

厚い水槽のガラスには、赤黒い血が広がっていた。

「なんだこりゃ、なんで血が・・」

見ると魚たちは一匹残らず、研究員のいた側のガラスに突進したらしく、分厚いガラスにも傷が入っていた。

そして、すべての魚は正確にその場所を目指し大きな尖った歯を見せて口を開けて死んでいた。

後になって、その実験の様子を撮影したビデオを見ると、ギンバエギョの眼球は、しっかりと獲物である研究員を捕らえていた。若い研究員は、そのあとすぐに研究所を退職し、初老の男はその恐怖から精神に異常をきたし始めて入院した。それ以来、その地下は立

ち入り禁止となり、そのビデオも持ち出し禁止資料として厳重に保管されている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5658c/>

深海の王

2010年11月5日07時24分発行